

第9回「ことばフォーラム」

<第1部>

話しことばの豊かさ，再発見

2002年3月24日(日)

山形県三川町　　なの花ホール

吉岡泰夫（国立国語研究所）

井上文子（国立国語研究所）

尾崎喜光（国立国語研究所）

佐藤治助（庄内ことば研究家）

堀　司朗（鶴岡市史編纂委員）

後援：山形県教育委員会・鶴岡市教育委員会・酒田市教育委員会・

山形県・三川町・三川町教育委員会

独立行政法人　国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

吉岡 ただいまから国立国語研究所、第9回「ことばフォーラム」を開始します。今日はようこそ「ことばフォーラム」においでいただきました。今日のテーマは「話し言葉の豊かさ、再発見」です。方言、共通語、敬語、共に生きているふるさとの話し言葉の豊かさをもう一回ここで見つめ直してみましようということで、こういうテーマの「フォーラム」を持ってまいりました。最初に国語研究所長の甲斐睦朗から主催者挨拶を申し上げます。

甲斐 本日は国立国語研究所の「ことばフォーラム」に御出席くださいまして、ありがとうございました。私は初めてこの三川町にお邪魔いたしましたのですが、このなの花ホールの立派さ、それから菜の花の色合いをスクリーンにまで出していらっしゃるセンスの良さに感心いたしているところです。今朝、飛行機で東京から参りました。私が今住んでいる所が皇居の近くで、国会議事堂を通って車で羽田へ向かったのですが、もう桜がはらはらと散っておりまして、東京の桜はもうすぐで終わりになるのかと思いました。今日三川町に来たら、お昼に少しだけ雪を見ることができました。素晴らしいと思ひまして、季節を深く味わうことができました。この三川町の「方言全国大会」については国語研究所も後援いたしております。また研究員を派遣したりしておりまして、また研究員の中にはこちらの授業を長年御世話になって撮影したりしている者もおります。今年度から「ことばフォーラム」を全国に向けて行おうということになったのですが、研究員から、全国へ向けてというならば、是非ともまずは三川町にお伺いしたいという希望が出ました。そこで今年は少し偏っているのですが、仙台と三川町という形で地方を選んだところですが。それだけにこの三川という町へ賭けた私どもの気持ちというものをくんでいただければと思っております。これから展開していきます「ことばフォーラム」の内容は、私が申してはなんですが、多分そのままビデオで撮影しておりますと、大変貴重な資料になっていくものではないかと思っております。会場の皆様からたくさんの御質問などが出ますと、一層質的に高まってくるとは思わないかと思うところです。また今日の「ことばフォーラム」に際しては、地元の何人もの方々から御協力いただいております。そのことについても感謝申し上げます。また三川町長以下、三川町の方々にもいろいろと御世話をかけました。そのことについてもお礼を申し上げたいと思います。それではこれから短い時間ですが、どうぞ日本の言葉、その中に占める庄内の言葉ということについて、皆さんも考えをいろいろと広げていただければとお祈りするところで

す。以上をもって御挨拶といたします。

吉岡 この「ことばフォーラム」を開催するに当たって、ご覧のとおり三川町をはじめとしまして山形県教育委員会、鶴岡市教育委員会、酒田市教育委員会、三川町教育委員会の御後援をいただいて、今所長が申し上げましたとおり、大変ありがたい御支援を頂いております。後援者を代表いたしまして、三川町長の佐藤京一様から御挨拶を頂きます。お願いいたします。

佐藤(京一) 皆さん、こんにちは。今日は国立国語研究所の甲斐所長さんのお計らいによって、この三川町が「ことばフォーラム」という、このような形で、「話し言葉の豊かさ、再発見」というテーマのもとに、これから開催されるわけです。私たちは社会で生活していくわけですが、その心の表現は話すか、文章にするか、そしてまた、体で表すか、この三つぐらいしかないのではないかと考えております。三川町は皆さんご存じのとおり、62年に全国方言大会を開催して、もう15年を迎えようとしているわけです。方言がだんだんと消え去っていく言葉ではないか、そんなふうに考えております。そのことからいたしましても、方言の大事さ、そしてまたそれは我々の生活の、今までのルーツと申しますか、生き方が方言に出ているのではないかと考えているところでありまして、生活の歴史が言葉に表れているのだと感じているわけです。最近若者の言葉を聞いておりますと、いろいろな面で変化をしております。これはやはり時代の変化であろう。分からない言葉がいっぱい出てきているようです。簡単に詰めたり、「自己中」などというのは話し言葉を詰めての対応であろうと考えているわけですが、やはり時代の要請によってと申しますか、生活によって言葉は変わってくるのだ、そんな思いをしているところです。国立国語研究所さんの研究によれば、やはり日本の言葉はしっかりした歩みを続けていかなければならない、そんな思いが最近しているところです。今日は三川町の方言大会に関わる方々や、それから言葉に関心のある方々がこのように大勢お集まりをいただきまして、研究所の皆さん、先生方と共々に言葉について考えるチャンスを得た、このことについて本当にありがたく思っているところです。町もこれからいよいよ方言に対して大変難しい課題があるわけですが、これを整理しながら、そして将来に残していかなければならないと思っている次第ですので、それぞれの方々から更に御指導、御教授を賜りながら、この町づくりの「方言」についての基礎固めをしてまいりたいと思っているところです。今日の「ことばフォーラム」は、全国でも町村では初めてだというお話も承っているわけでございます。本当に方言大会を開いている町にとっては大

変ありがたい、このようにお礼を申し上げて、今日のこのフォーラムが意義あるフォーラムになりますことを御祈念申し上げまして、一言簡単であります、お礼の挨拶に代えたいと思います。本当にありがとうございました。

吉岡 どうもありがとうございました。今日の進行については前のほうのスクリーンに出しておりますとおり、第一部を3時まで行います。それから15分休憩をして、3時15分から第2部、これは二つを同時進行で、下のほうの「方言による授業作りの可能性」は隣の部屋で行います。どうぞよろしく願いいたします。それではここで、2、3、事務連絡がございますので、ちょっとお待ちください。

塚田 今日お配りした資料の説明をいたします。封筒の中に入れてあります菜の花色の、黄色の表紙のものが第1部の資料です。第2部の資料は二つに分かれますので、それぞれに閉じてございます。「ことばビデオ」と「方言による授業作りの可能性」です。そしてアンケートは青いものになっておりますが、これを是非皆様に書いていただいて、お帰りの節に受付のほうに出していただきたいと思います。これを元にまた今後も「ことばフォーラム」を考えていきたいと思っております。それから「国語研の窓」という広報紙、研究所の概要、それから今日井上文子に関連の発表いたします『日本のふるさとことば集成』という各地の方言談話を採集したものの宣伝パンフレット、それから日本語教育の情報や教材を案内するネットワークづくりを進めておりますパンフレットなどが入っております。これは後ほど御自宅にお帰りになったらご覧いただきたいと思えます。

「庄内と国語研究所」吉岡 泰夫

(配布資料：p. 2～3)

吉岡 それでは早速第一部の一番目のプレゼンテーション、「庄内と国語研究所」と題して、私がこれから発表いたします。申し遅れました。私は国立国語研究所の吉岡泰夫でございます。これから20分、どうぞよろしく願いいたします。私ども国語研究所は昭和20年代から鶴岡調査を始め、最近の三川中学調査まで、庄内には大変御世話になっております。御世話になったお礼の気持ちを込めて、今日は「庄内と国語研究所」というタイトルで発表させていただきます。私ども国語研究所が創設された昭和23年ごろの日本語の状況を考えてみますと、各地域によって暮らしの中の話し言葉、とくに方言、これはもう非常に豊かでした。特色ある方言が各地にあって、それぞれの方言の違いがかなり大きいという状況でした。その一方で、よそ行き言葉として共通語というものが生

まれていた、そういう状況にありました。それで国語研究所は、昭和 24 年から「地域社会の言語生活」というテーマで調査研究を開始しております。鶴岡には昭和 25 年に第 1 次調査に伺っております。そのころの社会状況を考えてみますと、本来、方言と共通語は対等の価値を認めるべきものなのですが、実際は、特色ある方言を持つ地域の人々が自分の方言を不当におとしめられることによってコンプレックスを持って、よその人と自分の思うように話すことができないという言語問題が各地で起こっていました。そういう認識に立って、国語研究所では地域社会の言語生活を明らかにして言語問題の解決を図ろうとしたのです。そのためにはやっぱり問題を抱えている地域で調査研究を開始しようということで、まず、福島県の白河市、その次に鶴岡市へ来たということです。こういう研究を何のために、という目的ははっきりしています。地域に暮らす人々に幸せな言語生活を送っていただきたい、そういうことを研究の最終目的にしました。方言と共通語が共に栄える社会を築くためには、どういう課題を解決しなければならないか、そういうことを明らかにするために基礎的な調査研究を行ったのです。鶴岡市の皆様に御世話になった調査は第 1 次が昭和 25 年、1950 年に実施しております。この調査では、共通語化の要因とその過程、鶴岡方言の特徴、個人の 1 日の言語生活、こういう課題を持って参りました。それから次の第 2 次調査は昭和 47 年に参りました。そのときは第 1 次で一番の課題でした共通語化の要因と過程についてを重要課題として伺いました。それから第 3 次調査はまた 20 年後の平成 3 年、1991 年に参りました。3 度御世話になりました調査で、共通語化の進展状況、そこから、共通語化がどういうふうに進むかという共通語化のモデル、それから方言コンプレックスの問題、こういうことを明らかにしました。ここでちょっと考えてみたいのですが、共通語化とは一体何かということです。私は第 3 次調査から参加して、第 3 次調査で鶴岡のいろいろなところでいろいろな方にお目にかかって調査をしたのですが、なかなか鶴岡方言をお聞きすることができませんでした。調査に行く前には鶴岡方言はこんなものだとすることを予習して行きますから、自分が予習してきた鶴岡方言を全然聞かせていただけない。そういうことで、ここに座っていらっしゃる堀さん、後で御紹介しますが堀さんのお宅にお伺いして、堀さんのお部屋で、私は鶴岡方言をまだ全然聞いていませんが、こんなものでしょうかという愚痴をもらしたことがあります。我々はよそ者ですから、よそ者が、例えば鶴岡では汽車がとまる場所を何といいますかと聞くわけですから、共通語で聞くわけですから、それは駅としかおっしゃらないのです。それは当たり前のことだと思います。共通語化と

いうのは何かというと、共通語を習得してよそ者には共通語で、地元同士ならば方言で、そんなふうに使分けられるようになる、これが共通語化ではないかと思えます。これは、二つの言語変種を使えるということで、2言語変種併用、バイダイアレクタルといいます。日本語と英語などという二つの言語が使えるのをバイリンガルと言いますが、同じ日本語の中の二つの言語変種ということでバイダイアレクタルと言います。これが鶴岡で調べた20年間隔の共通語使用率です。これは調査の結果得られたことです。調査の場面で、これを鶴岡で何と言いますかとよそ者が尋ねて得られた結果です。例えば「いつも」ということを何と言いますか。私どもはトースンとっていただくのを期待して尋ねるのですが、トースンとはなかなか言っていだけない。それから「恥ずかしい」のを何と言いますかと言ったら、ショウスウとっていただきたいのですが、それは恥ずかしいとしか言いませんとか言われます。そういう調査の結果得られたものです。

(資料p2のOHP) 第1次がだいたい色です。第2次が緑、第3次が紺色です。こういう結果が出ています。横軸が年齢です。縦軸が共通語使用率になっております。これは発音とかアクセント、表現、言い回し、何々だからということスケとか、そんな言い回し、それから語彙など、いろいろな面での共通語使用率を併せて見たものです。それから一番下の赤ですが、これは調査以前はこうであったろうと推定しただけのものです。どうですか。第3次をご覧ください、どの世代もほとんど共通語、100%近い共通語使用率です。第1次調査を見ますと、共通語使用率が高いのは20代、30代の方々です。この方々はやはり広い範囲で行動して、交流していらっしゃる。東京に行き来するということもしょっちゅうあるという方々です。その世代が、共通語使用率が最も高くなっております。それから第2次調査では年齢が若いほど高く、10代が最高となっております。ちょっと考えてみましょう。第2次調査は年齢に比例しています。それから第3次調査は、ほとんどどの世代でも90%近い使用率ということで、年齢が関係ないという状況にあります。このように地域社会で共通語化が進む要因は何だろうということ、今から考えたいと思えます。ここでコメンテーターとしておいでいただいているお二人を御紹介します。向かって右側にお座りいただいているのが、『心にのこる庄内語』あるいは『暮らしのなかの庄内語』という御著書をお持ちの佐藤治助さんです。佐藤さんは鶴岡調査で大変御世話になっておりまして、インフォーマントも務めていただきました。佐藤さんは『はくぼく』という文芸誌の主宰もしていらっしゃいます。それから以前は学校の先生で、何と国語、社会、体育、美術、これだけ担当なさっていた

そうです。それから向かって左側は堀司朗さんです。堀さんは第1次鶴岡調査のときはまだ中学生でいらっしゃいましたのであれですが、第2次調査、第3次調査で大変御世話になりました。国語研究所の鶴岡支店長さんのような働きをしていただきまして、調査は堀さんのおかげで実施できたようなものです。第3次調査の結果について、堀さんのお部屋でお話したこともあります。こんなふうに鶴岡で共通語が話されているということをご覧になって、いかがでしょうか。ちょっとコメントをいただけませんか。

堀 鶴岡の堀でございます。よろしくお願いたします。その御質問にお答えする前に二つほど申し上げたいと思いますが、研究所さんのこの調査に、私は当時市立図書館の館員でありましたので、そういうことから2次と3次の調査に若干、ほんの少しだけですが、お手伝いを申し上げました。具体的というとなんですが、地域の歴史などを含めた社会状況の変化に関わる資料を提供申し上げたり、あるいは研究所さんで行う調査の中で、一般的な調査とは別に特別の調査ということなのではないでしょうか、その対象者となる10人の方を、私のごく任意的な選び方で、この調査にとって本当にその選び方が妥当であったかどうかは私には分かりませんが、紹介を申し上げた、そういうささいな協力を申し上げたのです。思い出すと、3次の場合ですが、本調査は非常に天気の悪い、確か11月の下旬に行なわれたと思うのですが、全部の被対象者が鶴岡で600人ぐらいなのではないか、30人ぐらいの先生がそれぞれ20人ぐらいの人たちに実際に会うために、市内を自転車で走り回る。みぞれ交じりの天気の中を走り回るというような大変御苦労をされている様子を拝見しております。地域の言語生活の実態といいますか、中でも共通語化というテーマの調査に、第2次と第3次になぜ鶴岡が選ばれたかというのは分かるような気もしますが、第一次のときに全国数ある市町村の中でなぜ鶴岡が選ばれたのだろうかということは私には分かりません。もしあれでしたら教えていただきたいと思うのですけれども、同じ地域で一定期間を経た3回もの調査が行なわれるということは、他に例がないのだそうでありまして、大げさにいえば世界でも初めてのことなのではなかろうか、研究所さんのあるおひとりの先生がそうおっしゃっていました。この調査による研究で学術的に大きな成果が得られているということで、被調査対象者である鶴岡の市民、鶴岡の住民としましてはこの私も含めて、それは大変幸いであったと感じているところなのです。それと同時に、このような調査をしていただいて、太平洋戦争後50年の鶴岡における市民生活の歴史を考えると、日常の言葉の変化をここで立証的に解き明かしていただいて貴重な資料を頂戴できた、これは大変ありがたいことであると

思っています。研究所さんにお礼を申し上げたいと思います。ただ今の御質問なのですが、これは一般的にも言われますように、鶴岡の場合は、戦時中といたしますか、都会から、特に東京から疎開者が非常にたくさんおいでになっております。恐らくそういうことが一番、鶴岡ではいわゆるタショベン(他所弁)と言いますが、都会の言葉を多くの人が聞いた最初のことではなかろうかと思うのです。そういうことが確かにありましたし、それから第二次調査が行なわれる以前からテレビが100%普及しておりましたし、それも大きく影響してきているでしょう。それからその当時から高校を卒業しますと、多くの方が大学へ就学するという事などもかなり大きく影響しているのだらうと思います。またいわゆる高度経済成長時代ですから、都会の人たちが鶴岡に赴任をしてきたり、それからその奥さんたちが鶴岡の中でいろいろなところで活動されたりしていく、そういう事なども鶴岡の共通語化ということに関して大きく影響していることなのだらうと思います。

吉岡 はい、ありがとうございます。それでこういうふうに共通語化が進むと気になるのは、方言は一体どうなるのかということです。共通語化が進むと、伝統的な方言が衰退するのではないかとということが非常に気になります。例えば庄内の伝統的な方言で、方言敬語の「ござる」とか「あがらしてくねへん」、こんな言葉はどうでしょうか。今使われているでしょうか。このような丁寧な気持ちのこもった伝統的な方言の敬語が衰退するというのは、私などは非常に惜しいことのように思います。しかしここにいらっしゃる佐藤治助さんもそうですが、庄内では伝統的な方言を尊重する気持ちが非常に強いのではないのでしょうか。三川町で方言大会をやっていたらっしゃるといっても、その一つだらうと思います。方言を尊重する機運が高くて、実際に使う活動とか記録に残す活動、こういうものが行なわれているところでは方言の活力をそんなに簡単に失うということはないだらうという気がしております。それから若い世代でも方言は衰退するだけではなくて、仲間内で使う新しい方言を生み出したり、あるいは伝統的な方言を復活させたり、そういうことも行なわれています。方言はまだまだ活力を保って変化していったといえるのではないかと期待しております。ここでちょっと佐藤さん……。佐藤さんはとくに『はくぼく』を主宰なさって、方言を記録に残す、あるいは方言を使った文芸ということをなさっていると伺いしましたが、ちょっと1, 2, 例を挙げて御紹介ただけませんか。『はくぼく』の取り組み、活動のちょっと御紹介をお願いします。

佐藤(治助) 佐藤です。『はくぼく』というのは今から40年前に庄内の教師が何人か寄り集まって文芸誌を発行するサークルです。ここにもいらっしゃいますが、佐藤一彦さんという方が詩を書いているらしいです。去年、全国の同人誌の最優秀賞を受賞された素晴らしい詩人です。この人も同人でありまして、彼の書いた詩を見ると、詩の中に会話が出てくると、それが庄内弁なのです。そんなふうには私たちのサークルでやっている詩、小説、昔話、そういうものの記録とか発表などは、会話があると庄内弁を使っています。藤沢周平さんの『春秋山伏記』という作品を2、3年前、秋田のわらび座が全国公演をしたわけです。そのときに脚本にしてくれた人が横浜の方なものですから、全部共通語で脚本化したものだから、周平さんがまだ丈夫な時ですが、それを見せましたら、これでは駄目だ、庄内の百姓が表現できていないということで、藤沢さんが私にこの脚本を庄内弁に直せと言われて、3か月ぐらいかかって直した記憶があります。いわゆる庄内の農民を表現するには共通語でしゃべらせては庄内の百姓でなくなると作家は考えていたのではないのでしょうか。例えば、横光利一という方の奥さんが鶴岡の人なものですから、横光利一は戦争、終戦の年を挟んで鶴岡に疎開してきました。さらに上郷村に移りまして、奥さんと二人だけ農家のうちを借りて生活したわけですが、そのときにその村から水沢の駅まで歩いていく時に、田んぼで働いている同じ村のソウゼム(宗左衛門)の阿バといいますが、ソウゼムの阿バが稲刈りをしていて、「稲刈りだか」といったら、阿バが立ち上がって、日本一流の作家に向かって、「だだ、どさいくや」といった。庄内の人だと、「だだ、どさいくや」というのは百姓同士がしゃべり合う会話なわけですが、そういうことが小説に、『夜の靴』という本にちゃんと書いてある。そういうふうには庄内で暮らした作家は、やっぱり庄内の農村を表現するには庄内弁でなければならないという考え方が割合強いのではないかと思います。そんなふうには感じました。

吉岡 はい、どうもありがとうございました。

佐藤(治助) どうも。

吉岡 お聴きになって、これぞ方言の活力を生み出す活動だということを実感していただけたと思います。今、日本各地で方言と共通語は対等の価値を認められて、共に生きていくという時代が来つつあります。本来、方言と共通語は対等の価値を認めるべきもので、使い分けるものなのです。これからお互いに方言の多様性を認め合い、方言も共通語も敬語も共に尊重して理想的な社会、多様性を認め合う理想的な社会が築かれることを、築かれつつあることをうれしく思いつつ、更に築いていってほしいということをお

います。それからいろいろな人と接して円滑なコミュニケーションができる、そういう多様な人が共生して生きていくという社会を築いていきたいものだと思います。以上、私の発表はここで終わります。続いて井上さん、どうぞ準備をお願いします。

「方言と共通語」—櫛引町の談話資料から— 井上 文子

(配布資料 : p. 4 ~10)

井上 こんにちは。国語研究所の井上と申します。今日は、方言と共通語のうち、特に方言のほうに注目して、庄内方言の一つである櫛引町の方言の会話を記録した音を聴いていただきながら、庄内の話し言葉について一緒に考えたいと思っています。よろしくお願いします。最初に、方言と共通語の使い分けについて整理しましょう。一人の人が頭の中に方言と共通語を両方持っていて、いろいろに使い分ける場合に関わってくるポイントがあります。まず相手がどんな人かということ。相手が同じ方言を話す人であれば方言がたくさん出てくるし、話さない人であれば共通語寄りになります。相手が同じ方言を話す人であっても、目下であるのか、同輩であるのか、目上であるのかによって、方言をたくさん使うか、それともちょっと共通語寄りにするかという調節をします。相手と親しいか、親しくないかによっても使い分けが行われます。次は、場面です。くつろいだ場面、私的な場面では方言が出やすく、改まった場面、公的な場面では共通語が出やすいでしょう。または同じ方言を話す相手と話をしている場合、会話をしている場所が自分の方言の地域であるか、そうでないかによっても変わってきます。それから、話題。お天気の話とか農作業の話とか、日常的话题ですと、普通は方言を使うことが多くなりますが、仕事の話とか専門的な話、抽象的な話ですと、共通語を使う傾向があります。そして話す場合はやっぱり方言、書く場合は共通語が多くなるという特徴もあります。今のことを簡単にまとめますと、最も共通語が使われやすい場合は、目上の人や親しくない人と改まって重要な話をするとき、そして書くときということがいえます。逆に最も方言が使われやすい場合は、親しい同輩や目下の人と地元でくつろいで私的なおしゃべりをするときということになります。今日はこちらに注目したいと思います。今から25年くらい前に、このような方言の会話を録音して残していこうという調査が行なわれました。ちょっと硬い呼び方ですが、「各地方言収集緊急調査」という名前がついています。全国的に方言が変化したり、無くなったりしているのですが、その前に各地の方言を都道府県ごとに緊急に調査して、録音して後世に残しておこうというのが目

的で、当時 60 歳から 80 歳代ぐらいの地元で生まれ育ったお年寄りたちの方言での自然な日常会話が録音されました。その資料を使って、昨年から国語研究所で「方言談話データベース」の出版を開始しました。会場の外に展示をしておりますので、後でご覧いただければ幸いです。山形県では 1980 年から 1982 年度に、6 つの市町村で収録が行なわれました。話題は日常的なこと、子供のころの遊びとか昔の農作業とか、嫁入り・婿取りのいろいろしきたり、年中行事のお話などです。ここでちょっと皆さんに考えていただきたいクイズをお出します。今から会話を三つ聴いていただこうと思います。そのうち庄内の言葉がどれか、当ててみてください。画面にも会話を文字にしたものを映します。方言の会話を文字にしたものは、片仮名を使っているのですが、普通の書き方とは違った特殊な使い方をしてしています。例えば「私は」というときの「は」を「ワ」と書く、「を」を「オ」と書くという具合です。「カキクケコ」に「°」が付いたものが時々出てきますが、それは鼻にかかるガ行の濁音を表しています。2 段で一組になっていて、上の段の片仮名が方言の会話の発音で、下の段がその共通語訳です。

では会話 1 ですが、どこの地域の会話でしょうか。

(会話 1)

- A ソレカラ アノー バン ナルトネ アノー ヨサリ チーマスワネ。
- B ヨサリワ ユー。
- C ヨサリワ ユーナ。
- B コレワー ヨー ユーナ。
- A コレワネー アノー ウチノ。
- C イマ ワタシラデモ ツコーテマスワネ。
- A ムスメガネ アノー ジョガッコエ イットツテ ヨサリ ユーベ ヨサリニコ
ンナヤッタ ユータ アンタ オーバーハンミタイナコト ユーネンナー ユーテ
ワラワレタ ユーテネ。ヨサリ チューコトバモネ アノー アンマリ イマー
ツカイマセンネンナ。ヨサリ。
- D ソーデンナ。
- A ナ。
- D ツカイマセンネンナ。
- B ツカワシマヘンナ。
- A ンー ソヤ。ナー ムカシワ ヨー イーマシタナ。ヨサリ チュナナ。

E ヨサリ アメ フツカカラ トカネー。

A エー。ヨサリニ アメ フツタ トカネ。

井上 いかがでしたでしょうか。ご自分の言葉と比べて、どうでしょうか。これが会話1です。次は、会話2です。

(会話2)

A ベロドヨ アノ コノ マズ コノベロツダナネ。ホノ ハエズド コノハド マズ マックロケシテ クタモンダス。

B ンダ。

A ホシテ ナニ クタナヤレテ ヤレンナツダナネース。ンダド ナスダテナレ ナス モエデ クテキタンダ テヨ。ホダナ ホガンナド ゴシヤガレンベナ ナテ ヤツジェナレ ホーシテ ゴシヤガレンモ ナニモ ホデ ナエツダナー。ホダン ドギ。

B ンダ。

A ホンテ ナマナスザ ンマエケモネ。

B ンダ ンダゲンド ンマエゴドモ ナエナツダーネ。ギャグニ エバ。ホダナ ヒデリノ カンカンデユドサ ナテル ナス モエデ ナガ アタカエ ナス クナダモノ ホダナ ショーズギ エバ ンマグナ ナエナヨ。ホンデモ ヤッパリホダナ ナニガ ユグナエゴド サンナネナダケベズ アエズネー。ホダエ クダエワゲデモ ナエガッタド オモーゲンドモナー。ナンニモ クモノ ナエガラマダ クワ クタンダベゲントモナー。

井上 というのが会話2です。どうでしょうか。では、次は会話3です。

(会話3)

A ンダ ニダリヨツタリダノ。

B ドゴネダタテ ソノフーシューデノ。

A オナゴワ イズマデモ ネラインナハ ガンズズノ ヒバツカリダヤノー。

B マズ ソゲダモンダケノ。ガンズズワ マズ オナゴショワ ネデレ ド。トスオドゴカ^o ナニモカニモ ミナ ステ。マズ ソノ ゾウニモズ。イマワ ホレ ナンダカダテ ヤツツイデダドモノ。ニグモ ハラネモダケス イモノクギサ ナンダ ヤギイワスデモ ヤギボスデモ ヘレバ ジョートーノホーデ アブラゲデモ イダリ ソーユーヨーダ ヤリガダステ。

A ソノ イッショーガラ ナンボ デガノ。ジューニサン デルガ ジューゴデツガ
ノ。モズ トー クッタドガ ナナツ クッタドガ ヨッツ クッタドガ ジマン
ゴケ° クッテダモンダノ。

B ンダ トスノ カズ クド イー ワガジェ ナル ソワイデノ。ウン イッペ
クー ストダバ ヤッパリ ジューズズハズモ クタモンデロノ。

A ジューズズハズワ ナンダガモ スネドモ。

B ワレワレダテ ナナズヤ ヤッツダバ マズ ンダノ チャワンサ フタツツナノ
デッテ ヘレバ ツユ カゲライネホドノ モズダモンダケドモ ソノモズ ヤッ
パリ ジューゴロッパ ジューニサンワ クッタモンダノ。

井上 以上の三つの会話で、どれが庄内の言葉かお分かりですか。さすが正解の声が聞こえていますね。ではクイズの答えを見ていきたいと思います。1番目は自分の言葉とずいぶん違うという感じでしたでしょうか。これは大阪市の会話です。2番目は少し似ているけれど、やっぱり違うという感じでしょうか。これは寒河江市の会話です。そして3番目は櫛引町の会話です。どこで庄内の言葉とお分かりになったでしょうか。庄内の言葉の特徴を少し会話の中から拾ってみましょう。お年寄りの言葉の中には伝統的な言い方が見られます。例えば先ほど聴いていただいた中に出てきたものでは、「ノー」とか「ノ」とかがありますが、これは共通語の「ねえ」とか「ね」に当たるものです。この「ねえ」に当たるものは山形県内でも地域差があって、「ノー」を使うところと「ナー」を使うところで分かれているようです。方言を地図にしたもので確認しましょう。山形県に薄い黄色をつけて、庄内地方も少し色を変えておきました。赤い丸い記号が「ノー」というところ、緑の三角が「ナー」というところ、星印が「ナヤ」というところ、あと「ネー」というところもあります。庄内にだけ赤い記号、つまり「ノー」があるということが分かります。「ノー」のほかにも山形県内で庄内にだけ現れるものがあります。共通語の「だろ」に当たる「デロ」とか「ダロ」です。この共通語の「だろ」に当たるものにも山形県内あるいは東北地方で地域差があって、「ダロー」を使う地域と、「ベー」を使う地域で分かれています。これも方言を地図にしたもので確認しましょう。赤い丸い記号が「ダロー」というところ、緑の三角が「ベー」というところ。「カクダロー」というか「カクベー」というかで庄内とほかの地域が分かれています。ですから山形県内の人には「カクベー」といっているのか、「カクダロー」といっているかで、どの地域の出身なのかということが分かるでしょう。もう少し広く東北地方を見てみますと、

日本海側にずっと赤い丸い記号「ダロー」の地域があつて、それ以外はかなり広く「べー」という地域であるということが分かります。先ほど聴いていただいた中には出てこなかったのですが、もう一つ庄内の言葉の特徴と言われるものがあります。共通語の「から」に当たる「ハゲ」とか「サゲ」とかです。これは関西方言で「から」を表すことば「サカイ」が伝わって変化したものだと言われています。全国の方言の地図を見ますと、「サカイ」のグループ、「カラ」のグループ、「ケン」のグループ、「デ」のグループがあります。赤い記号が「サカイ」や「サカイ」の仲間です。「ハゲ」「サゲ」も「サカイ」の仲間と考えて赤い記号になっています。緑の記号は「カラ」東北地方から関東地方にあります。「雨が降っているから」と言うわけです。水色の記号が「ケン」です。「雨が降つとるけん」「雨が降つとるけー」と言います。茶色の記号が「デ」です。中部地方と鹿児島にあります。「雨が降つとるで」と言います。東北地方に「サカイ」のグループがあるのは、関西の「サカイ」が北前船に乗って日本海沿いに伝わって広がったのだと言われています。こういうふうには歴史を考え合わせますと、庄内の言葉を考える上でもいろいろと面白いわけです。これ以外にも庄内の言葉にはこういう特徴がある、面白いことがあるというのを地元の佐藤治助さんのほうから少しお話いただければと思います。

佐藤(治助) ただ今の井上先生のお話はそのとおりだと思つて聴かせてもらいました。ただ考えてみると庄内を、庄内とまとめていますが、私などは同じ庄内の中でも場所によって違うということの一つ申し上げておきたいと思つています。例えば鶴岡ガタ(方)だったら鶴岡の農村部と、それから昔、士族の人たちが住んでいた、いわゆる旧士族町の住人と、それから商店で物を売ったり買ったりする商人の言葉と、それから海岸の漁師の言葉というのは、それぞれちょっとしゃべっていると、この人はこういう地方のこういうことをやっていた人だというのが大体見当がつくのです。例えばもっと細かいところをいうと、私は三瀬に行ったときに面白いことを聞いたのです。「佐藤さん、同じ三瀬でも、庄内の人なら分かると思つますが、由良と三瀬と堅苔沢と同じこういうような村だけれども、言い方が違うのだ」と言われました。例えば「いいなさい」、「いえ」という言葉を、堅苔沢だと「ホエ」という。「ホエツイウソツ ホッタテバ ホナンテホーク」と言われた。それから三瀬に来ると、「ホエ」ではなくて「ソエ」と言う。「ソエツイウソツアレバ ソウナツテ ソウケ」となる。それから由良へ来たら、由良のほうは「シュエ」だと言う。「シュエテシュタレバ シュウナツテ シュウケ」と、そういうふうには違いがある。だから会話をしていると、この人は由良の生まれだとか三瀬の生まれだと

かがすぐ分かると言われて、私はなるほどと思った記憶があります。今、井上先生のお話を聴きながら、庄内を一括されましたが、厳密にいったら庄内の中でも違いがあるのだということの一つ言っておきます。それから、共通語ではない庄内の単語のことを一つ二つ言いますと、例えば、黒川には「カンジョウ」という言葉があります。「カンジョウ」というのは、これは共通語で1, 2, 3と100まで数える勘定、それから何かを買って最後に支払いをするときに勘定をする、支払いをする、これはちゃんとした共通語です。ところが黒川ではそうではなくて、庄内の農村にはもっと違った「カンジョウ」がある。例えば「アシタカンジョウドウダヤ」。明日の予定はどうだ。「アシタカンジョウドウダヤ」ということは数を数えるとか支払いではなくて、あなたの明日の予定は何かですか、こういう意味です。それからその「カンジョウ」はこういうときにも使います。私などはよく母親から言われましたが、修学旅行などに行くとき、金を1万円もらった。すると大事なものを買わないで、あめとかまんじゅうとか皆買って食ってしまう。どうしたやと母親から言われて、まんじゅうを食ったという。「ワネハカンジョウネエベ」という。計画性がないということなのです。配慮がない、そういう意味でも「カンジョウ」が使われる。「シタラコノマンジュウ、ミツズツノカンジョウデクバレチャ」、三つずつという意味でもある。それから「オレワ、アシタイクカンジョウダ」、行くつもりだという付属語の意味でもある。そういうふうに庄内の言葉の単語には共通語にない、実に豊かな形象を持った言葉が割合多いということを申し上げたいわけです。もう一ついいですか。

井上 はい、どうぞ。

佐藤(治助) 小さいとき、私が親戚のうちにお祭りで呼ばれて行くと、腰の曲がったババチャが、ババチャは学校に入っていないのです。小学校は全然知らない。ところが私がおぜんに座っていると、腰の曲がったババチャが出てきて、「イイカ、ジスケ、キョウハマツリダサケド、ジギサンタッテキーテキーサカイミンナケーヨ」、あるごちそうを全部食べなさいと言う。「ジギサンタッテキーテキーサカイミンナケーヨ」と言った。この「ジギ」というのは、ちゃんと共通語にあります。「ジギ」というのは礼儀をする、それから節約をする、「辞退」の「辞」と「儀式」の「儀」、人偏の「儀」で「辞儀」です。その「辞儀」というのを辞典を調べるとそういう共通語になるのだけれども、最後に広辞苑などにこの「辞儀」は昔は遠慮するなという意味で使っていたと書いてあります。すると学問を知らないいわゆる農村のババチャが、腰の曲がったババチャが「ジギサンタッ

テキーテキーサカイミンナケーヨ」, 遠慮しなくてもいいからみんな食べよと, いわゆる最も難しい日本語の今使われなくなった言葉を生活の中でちゃんと使っているのです。だから共通語で今使われなくなったそういう言葉も, 庄内語の中には単語として残っているということを訴えたいのです。いいでしょうか。なんぼもありますが, この辺で終わらせていただきます。どうも失礼しました。

井上 ありがとうございます。庄内の言葉は奥が深いということも, それから庄内を一括してまとめてはいけないということも学びましたので, これからもっと勉強させていただきたいと思います。私の発表はこれで終わります。どうもありがとうございました。

吉岡 佐藤さん, ありがとうございます。やっぱり説得力が違いますよね。もう一度ここで佐藤さんの御著書を紹介しておきます。『心にのこる庄内語』, それから『暮しのなかの庄内語』です。佐藤さんは庄内方言を庄内語とおっしゃいます。どうもありがとうございました。では引き続きまして, 「若者の敬語」というタイトルで尾崎が発表いたします。

「若者の敬語」—三川中学校の調査から— 尾崎 喜光

(配布資料 : p. 11~19)

尾崎 皆さん, こんにちは。尾崎喜光と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。先ほどの井上のお話は伝統的な言葉についてのお話でしたが, 3番バッターの私のほうからは「若者の敬語—三川中学校の調査から—」という題で, かつてこちらの三川中学校で調査させていただいた結果などを御紹介しながら, 最近の若者の言葉についてお話させていただきます。私もスライドを使いながらお話を進めますが, ご覧いただく画面と全く同じものを御手元の資料として用意いたしましたので, どうぞそちらのほうも適宜御参照ください。最初に本日のメニューとしてお話の目次をお示しします。最初は, これは三川中学校での調査の話ではないのですが, 最近私が注目しております「寒いですね」を「寒いっすね」と言う, 主に若者が最近盛んに使っている敬語について, 個人的に調査したところを御紹介します。その次に三川中学校で調査させていただいた結果分かってきたことについて御紹介しますが, 三川町は全国方言大会の開催でも有名だということもありますので, それに敬意を表して多少方言の話も交えながら幾つか御紹介します。アンケート調査と面接調査を実施したのですが, アンケート調査のほうからは自称詞, 自分を指す言葉を自称詞と呼んでいますが, 自称詞の使い分け, それからこちら

の方言の「ダノー」のような文の末尾、終助詞の「ノー」の相手による使い分けを御紹介します。一方、面接調査のほうからは学校の中の目上の人、先生とか上級生ですが、そうした目上の人に対する敬語使用がどうであったのかをお話します。これに関連して5年ほど前に東京都民を対象に実施した調査結果を少し御紹介します。最近若い人たち、特に若い男性を中心に「寒いっすね」という言い方が盛んに使われているようです。テレビの文字スーパーにもそのままの形で出てくることも珍しくなくなりました。こちらの庄内でも使われているのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。この言い方はもちろん「寒いっすね」、これが基にあって、このうちの敬語の部分の「です」の「で」の部分飲み込まれるように弱まって生まれた形だと思います。「寒いっすね」が「寒いっすね」、こうなるわけです。一体どのぐらいの人がこれを使っているのか、首都圏の大学と関西圏の大学の学生を対象に、昨年個人的に少し調査をしてみました。質問は、先輩から昨日ハイキングに行ったかどうかと聞かれて、行ったという内容を答えるとしたら、次の各表現を自分で言うことがあるかどうか、これを答えてもらいました。首都圏の大学でも関西出身という人もいますので、ここでの集計では5歳から15歳の最長居住地、一番長く住んだ所ですが、それが地元、首都圏の大学では関東、関西圏の大学では関西ですが、それに該当する回答者を抜き出して分析しました。表の数値は「言う」の回答です。これを見ますと、一番上の「行きましたよ」という言い方、これは関東の男性、関東の女性、関西の男性、関西の女性、いずれもほぼ全員が「言う」と回答しています。これに対して上から三つ目の「行ったよ」という敬語を含まない言い方を先輩に向かって「言う」と回答した人は男性で約2割、女性で約3割と余り多くありません。これを関西風にした「行ったで」を「言う」と回答した人も2～3割にとどまりました。さて、問題の言い方は赤で示しましたが、上から二つ目の「行ったっすよ」ですけれども、男性は関東も関西も約6割、女性は関東も関西も約2割が「言う」と回答しています。関東でも関西でも、若い男性を中心に盛んに使われているということが分かります。全国的な傾向なのかもしれません。なお、この私の資料の末尾には新聞記事をコピーしておきましたが、このうちの2に今の話が載っております。ここでは特に触れませんが、どうぞ後で興味があったらご覧ください。さて、「寒いっすね」という言い方はそれ自体面白い言い方であるのですが、言語学的に見てもなかなか面白いと私は思っております。丁寧語には「です」と「ます」の二つがありますが、どんな言葉にくつつくかは分担体制をとっていて、「寒い」のような形容詞の後ろ、「静かだ」のような形容動詞の後ろ、

「三川町」のような名詞の後ろには赤で示しましたが、「です」が来て「寒いです」、「静かです」、「三川町です」となります。それに対して「行く」のような動詞の後ろには緑で書きましたが、「ます」が来て「行きます」となるわけです。これが「っす」になりますと、「寒いっす」、「静かっす」、「三川町っす」、「行くっす」とすべてに共通してくっきます。つまり「です」「ます」二系列の丁寧語が「っす」一系列になるわけなのです。もう一つ面白いと思いますのは、動詞の場合、もし「行きます」の「ます」が弱まって「っす」になったとすると、ここですが、イ段にくっついて「行きっす」となるはずなのですけれども、実際にはそうはならず、下のほうですが、言い切りのウ段にくっついて「行くっす」となる、この点です。恐らく動詞以外で使われていた「っす」、これを動詞にもそのまま持ってきて、くっつけたということだと思います。ちなみに山形県にはもともと「イグッス」のような言い方があるようです。それが今や全国に広まって普及している、そういう可能性もないではありませんが、恐らくこれはそれとは別個に生まれて普及していったのではないかと考えています。本題に入る前に、最近私が注目している若者の敬語について少し御紹介しました。次からが本論です。国立国語研究所では先ほど吉岡からお話しましたように、こちらの三川中学校で敬語使用や敬語意識に関する調査を10年ほど前にいたしました。大変遅くなりましたが、現在その報告書刊行の最終段階で、4月刊行を目指して今頑張っているところです。実はこの調査は三川中学校だけで行ったのではなく、ここに掲げました地域で行いました。上がアンケート調査ですが、全部で6021人の生徒さんを調査しました。内訳は東京都の中学生が2456人、東京都の高校生が2222人、大阪府の高校生が1004人、そして山形県の中学生が339人です。このうちの山形県の中学生が、実は三川中学校です。東京や大阪ではいろいろな学校を対象としましたが、山形の場合は三川中学校1校だけでして、厳密にいきますと、山形県の平均的な状況とは必ずしもいえない部分があるかもしれません。一方、面接調査のほうですが、こちらのほうは342人を調査しました。内訳はここに示したとおりです。以下、残りの時間を使って、この中から面白いと思われる調査結果を幾つか御紹介いたします。まず自称詞の使い分けということについてお話します。自称詞というのは先ほど申しましたように、自分を指す言葉のことです。例えば英語ですと、自称詞は「I」くらいしかないわけなのですが、日本語の場合は皆さんご存じのように「オレ」とか「ボク」とか「ワタシ」、「ワタクシ」、「ワシ」などいろいろな言い方があります。こちらでは「オイ」などという言い方もあるようですし、関西ですと「ウチ」とか

「ワテ」などという言い方もあります。小学生の女の子ですと、「ヒロコがね」のように名前を使うこともあります。皆さんは御自身のことを、ふだん何とおっしゃっているでしょうか。さてこの自称詞ですが、私たちはいつ、誰に対しても同じ言い方で一本やりで言うかという、実はそうではありません。家族に対しては「オイ」とか「オレ」と言う人であっても、もしこの会場で発言するとしたら、恐らく「ワタシ」とか「ワタクシ」、こういう言い方をするのではないのでしょうか。中学生や高校生も同様に、相手や場面によって使い分けをしているようです。その辺のところを少し御紹介します。これは男子生徒が同性の友人に向かって言う場合です。東京の中学と山形の中学を対比する形で示しました。青色の棒が東京、赤色の棒が山形です。左側に縦に並べた言葉がありますが、上から読んでみますと「ボク」「ワタシ」「アタシ」「ワタクシ」「アタクシ」「オイ」「オレ」「オラ」「ウチ」「ワシ」「ワイ」「ジブン」「名前」「その他」となっていますが、これは調査票で掲げた選択肢です。回答は、自分だったらその言い方をするかどうか、一つ一つについてチェックしてもらいました。さて、男子の中学生の間で一番多い言い方は「オレ」のようです。しかしこの他にも山形では「オイ」、東京では「ボク」も少なくありません。この山形で「オイ」が多く、「ボク」は少ない点、逆に東京では「ボク」が多く、山形方言の「オイ」は使われていないという点で、東京と山形とで地域差がやや大きくなっています。これに対して校長先生に向かって言う場合は、随分状況が変わります。東京も山形も「ボク」への集中が著しいために、東京も山形も似たようなグラフになります。結果として、地域差はほとんど見られません。つまり言葉の地域差というのも、友達に対する場合は比較的大きいのに対して、校長先生に対する場合は小さい、つまりどの地域でも皆同じような言い方になる、というように、地域差というものは大きくなったり小さくなったりと、伸び縮みするようです。さて、今の二つのスライドからも、友達に対する場合と校長先生に対する場合とで言葉の使い分けをしていることが分かったわけですが、これをもう少し詳しく見てみましょう。これはこちらの方言の「オイ」という言い方について、相手による使い分けを示したものです。左側に縦に並べた6人を想定してもらいました。確認しますと、上から順に同性の友人、異性の同級生、同性の先輩、担任の先生、校長先生、男性の来客、この6人です。グラフは男女に分けて示しました。青色が男子、赤色が女子です。これを見ますと、方言の「オイ」は生徒同士ではざっと半数の生徒が使っている一方で、校長先生や来客に対して言うという生徒は少ないようです。東京から来た私どもなどと話をする場面では、まず聞くことので

きない表現でありまして、うっかりしますと庄内の中学生は「オイ」などもう使っていない、そんな印象を持って東京に帰りそうです。このように「オイ」には使い分けが明確に見られて、主として仲間内の言葉と意識されているようです。なお、東京では仲間内ですと男子は「オレ」、女子は「アタシ」となって、男女共通に使える自称詞というのではないのですが、この「オイ」というのは男女共通に使える点は地元の皆さんには自明でしょうけれども、なかなか面白いと思っております。この「オイ」と使い分けのパターンが逆になるのが、今スクリーンで示しました男子の「ボク」と、それから後で示しますが女子の「ワタシ」です。男子の場合ですが、この「ボク」を山形と東京を対比する形で示しました。東京も山形も生徒同士では余り使われませんが、先生や来客に対してはよく使われます。つまり「ボク」というのは大人に対する改まった言い方と意識されているようです。さて、東京も山形も右下がりのグラフになっている点は同じなのですが、青色の東京はその落差がそれほど大きくないのに対して、赤色の山形はその落差が随分大きくなっています。つまり東京は使い分けの幅がやや小さめであるのに対して、山形は使い分けの幅がかなり大きくなっています。このように使い分け方にも地域差というものがあるようです。このスライド、次はこれですが、これは女子の「ワタシ」を示したのですが、先ほどの「ボク」と同じ傾向がここにも認められます。さて、男子の場合、友達に対して「オイ」以上によく使われる表現は「オレ」でしたが、その使い分けを示したのがこのスライドです。先ほど示した「ボク」と逆に、主に生徒間でよく使われる表現のようです。グラフを少し細かく見ますと、同性の先輩や担任の先生に対しても赤い色の山形では数値が結構高く、東京と開きがあります。山形では同性の先輩は友達感覚、担任の先生も東京よりは友達に近い距離感覚なのかもしれません。さて、先ほど山形の「オイ」は男女共通に使われると言いましたが、実は「オレ」にもその傾向が少しだけですが認められます。これは山形での「オレ」の使用を男女別に示したのですが、男女で明確な開きはあるものの、友達に対する場合であれば女子も2割ぐらいいは「オレ」を使っています。東京では、数値はほとんどゼロです。山形の場合、恐らく彼女たちの母親世代、祖母の世代ですと、もっと普通に「オレ」を使っていたのではないかと考えられますが、いかがでしょうか。次にもう一つアンケート調査から、皆さんもよくお使いになります文の末尾の「ノー」という方言の終助詞の使い分けについて、山形での調査結果を御紹介します。相手からそうかと聞かれて、肯定的に答えるときの「ンダノー」と、それから別れの挨拶の「ンダバノー」と「マズノー」、この結果を御紹

介します。まず「ンダノー」についてですが、男女に分けて示しますとこのようでした。主に生徒に対して使われる左下がりのグラフになっています。仲間内での言葉のようです。同性の友人、異性の同級生に対しては、赤い色の女子のほうが青色の男子よりもよく使っているようで、男女差もあるようです。次、これは別れの挨拶のうちの「ンダバノー」ですが、それほど使われていないようです。とくに担任の先生とか校長先生に対しては、「ンダバノー」はほとんど使われていません。なお、別れの挨拶では来客は想定人物とはしなかったために、相手の人数は6人ではなくて5人となっています。次の「マズノー」も同じような状況ですが、女子の使用が少ないために、主に男子が先生以外の生徒に対して用いる表現となっています。文末の「ノー」もどういう表現の中に使われるかにより、使われやすかったり使われにくかったりするようです。また「ンダノー」は女子が使いやすいけれども「マズノー」は男子というように、男女差も単純ではないようです。別れの挨拶の「ンダバノー」や「マズノー」は生徒同士で使われる表現でした。ダバ、先生に対しては何と言っているかといいますと、一番多い表現は「サヨウナラ」でした。同性の先輩に対する場合は男女差がちょっと大きくなっていますが、男子は先輩に対し「サヨウナラ」を余り使わないようです。以上はアンケート調査からの御紹介でした。次に面接調査から少し御紹介します。面接調査では生徒さん二人ずつがペアになって調査員の所に来てもらい、会話の内容や状況を設定した上で、ふだん二人の間でどのようなやりとりになるか、ロールプレイング的に会話をしてもらいました。今日御紹介するのは、「自分は行くけれども相手は行くか」という内容を尋ねる場合にどう言うか、これを調べたものですが、目上である先生や上級生に言う場合をここでは抜き出して、東京と山形を比べながら御紹介します。どんな言い方が実際に聞かれたかといいますと、例えば「僕は行くんですが、先生は行かれますか」とか「私は行くけど、先輩は行きますか」とか、あるいはこちらの三川中学でありますと「おいは行くけどやあ、おめえ行く」、こんな言い方が得られました。スライドで示してありますように、今日のお話での注目点は全部で4カ所あります。一つはこの部分です。「自分は行くけれども」の「行く」の部分はどう言うかです。「参る」という謙譲語にするか、謙譲語のない「行く」で言うかです。そしてその後ろのほうですが、ここです。その後ろに丁寧語の「ます」とか「です」をつけるかつかないかです。例えば謙譲語ありで丁寧語ありですと「私は参りますが」のようになり、両方ともなしですと「私は行くけど」のようになります。もう一つは下の段ですが、「相手は行くか」のこの「行く」の部分はどう言うか

です。まずここですが、「行かれる」や「いらっしゃる」という尊敬語にするか、それとも尊敬語のない「行く」で言うかです。そしてその右側、ここですが、その後ろに丁寧語の「ます」とか「です」をつけるかつかないかです。例えば尊敬語ありで丁寧語ありですと「先生は行かれますか」のようになりますし、両方ともなしですと「キョウコ先輩は行く？」のようになります。最初のこのスライドは自分の動作への謙譲語の使用、つまり「自分は行くけれども」の「行く」を謙譲語の「参る」などで言うか、それのない「行く」で言うかです。棒は4本ありますが、上から順に山形の中学の上級生に対する場合、二つ目が山形の中学の先生に対する場合、三つ目が東京の中学の上級生に対する場合、もう一つは東京の中学での先生に対する場合です。これを見てみますと、いずれも赤が全部です。100%です。謙譲語なしの赤一色でありまして、少なくともこのデータによりますと、謙譲語というのは中学生の間では全く使われていないようです。次は「自分は行くけれども」の「行く」の後ろに、「です」「ます」の丁寧語をつけて言うかどうかです。調査では自分の動作として調べたわけですが、ポイントはむしろ文の末尾ではなくて、文の中ほどでの丁寧語を挟んで言うかどうかです。グラフを見てみますと、この青色の丁寧語ありが結構出てきます。先ほどの謙譲語の場合と異なりまして、丁寧語ということであれば中学生でも少なからず使っていることが分かります。山形も東京も、上級生に対してよりも先生に対してのほうが丁寧語をよく用いているようです。また山形と東京を比べてみますと、これは上級生に対する場合であっても先生に対する場合であっても、東京のほうが山形よりも丁寧語をよく用いているようです。山形の場合は東京と比べますと、上級生や先生との心理的距離がやや近く、言葉の点でも丁寧語などをそれほど使わないのが自然だということでしょうか。次は相手の動作への尊敬語の使用、つまり「相手は行くか」の「行く」を尊敬語の「行かれる」とか「いらっしゃる」などで言うか、それともそれのない「行く」で言うかです。いずれも赤の尊敬語なしの面積が大きくなっていて、少なくともこのデータによりますと、尊敬語の使用というのも中学生の間では余り一般的ではないようです。特に山形では尊敬語の使用はゼロです。ただし東京では少しだけですが、尊敬語が用いられているようです。最後は「相手は行くか」の「行く」の後ろに「です」「ます」の丁寧語をつけて言うかどうかです。相手の動作の表現として調べたわけですが、ポイントはむしろ文の末尾で丁寧語を言うかどうかです。グラフを見ますと、文の末尾では丁寧語が結構使われていることが分かります。文中の場合と同様に、相手による違いとか、山形と東京との違いも認められま

す。丁寧語ですが、文中と文末を比較しますと、文末でのほうが一層丁寧語が用いられているようです。スクリーンはちょっと画面が小さくて見にくくなりますが、先ほどの二つのグラフを並べて示しますと、このようになります。全体的に左側の文中に比べますと、右側の文末のほうが青色の面積が少し増えていまして、丁寧語が一層使われていることが確認できます。グラフではそのことを真ん中の太い、黒い不等号で示してみました。つまり「僕は行くけど、先輩は行きますか」のような文末にのみ丁寧語が使われるパターンが少なからずあるのだということになります。まとめますと、中学生の間では尊敬語や謙譲語のような敬意の高い敬語は余り使われていないが、丁寧語であれば結構使われているということが、この面接調査の結果から見えてきました。実は目上に対する敬語が丁寧語だけでも構わないという意見、これは若年層に向けて増加してきているようです。今ご覧いただいているこのスライドは、5年ほど前に東京都民約1000人を対象に調査した結果です。ここでは自分で言うか言わないかではなく、先生に対し「来るか」という内容を尋ねる言い方として、凡例として掲げた四つの言い方がおかしいと感じるか、おかしくないと感じるかを尋ねました。グラフでは折れ線が4本ありますが、上から順番に「いらっしゃいますか?」、「来られますか?」、「来ますか?」、「来る?」です。最初の二つは尊敬語と丁寧語の両方を含む言い方で、三つ目の「来ますか?」は丁寧語だけを含む言い方、最後の「来る?」は丁寧語さえ含まない言い方です。横軸は10年刻みの年齢層、縦軸は「おかしくないと」回答した人の比率です。これを見ますと、一番上の「いらっしゃいますか?」とか上から二つ目の「来られますか?」はどの年齢層でも「おかしくないと」がかなり多くなっています。それに対して意見が分かれるのは上から三つ目の「来ますか?」ですが、右側の上の世代では数値が低いのですけれども、若年層になるにつれて数値が上昇していった、一番左側の20代ですと約7割の人がこれでも「おかしくないと」回答しています。つまり先生に対する言い方として丁寧語のみにとどまる軽い敬語でも「おかしくないと」という意識が、東京では次第に広まってきているようです。恐らく全国的な傾向かと思われますが、中学生の面接調査でもこれと同じ傾向が見られたというわけです。最後に、今日お話したことをまとめてみました。

- ・ 相手が校長先生の場合は地域差が小さい。地域差も相手により伸縮する。
- ・ 方言の「オイ」は主として生徒同士で使用。
- ・ 「ボク」「ワタシ」は主として先生に対して、「オレ」は主として生徒に対して使用。
- ・ 山形では女子も「オレ」をある程度使用。

- ・ 方言の終助詞「ノー」を含む「ンダノー」「ンダバノー」「マズノー」は、主として生徒同士で使用。先生への別れの挨拶は「サヨウナラ」になる。
- ・ 面接調査の結果によりますと、謙讓語はほとんど使われない。尊敬語の使用も少ない。
- ・ これに対し丁寧語は比較的よく使われる。上級生よりも先生に対してよく使われる。文中よりも文末でよく使われる。山形よりも東京でよく使われる。
- ・ 若者の間では目上に対する場合、丁寧語だけでも十分と意識される傾向が出てきているようだ。

以上のようなことを今日お話ししました。最後におまけですが、今日のお話の関連資料として次の三つのものがあります。最初のは今年の4月刊行予定で、値段がちょっと高くて申し訳ありませんが、三川中学校とか三川町にはお送りしたいと思います。よろしかったらどうぞ御参照ください。どうもありがとうございました。

【質疑応答】

吉岡 以上、三つの発表を行いました。これはすべて御世話になりました調査の結果を、お礼の気持ちを込めて御報告したものです。それで、ここでちょっとだけ、この三つの発表すべてにわたって御質問、御意見を頂きたいと思います。どなたからでも結構ですので、挙手をお願いいたします。マイクを準備してください。どうぞ、何でも構いませんので。はい、それでは国語研究所のOBで鶴岡調査や、長年三川町の方言大会にも協力してきました佐藤亮一が、ここで一言お礼を申し上げます。佐藤さん、どうぞ。

佐藤亮一 東京女子大学におります佐藤と申します。一言三川町の方々、庄内の方々にお礼を申し上げたいと思います。私は以前、国立国語研究所の方言の研究室に勤めておりました。そのときですけれども、1988年、今から12年前ですが、三川町で方言と共通語の使い分けに関する調査を行いました。三川町の役場の一室を1週間お借りして、研究者、国語研究所員など10人ほどがそこに詰めて、三川町の若い方からお年寄りの方まで74人の方について調査をさせていただきました。そのときの結果を簡単に申しますと、若い方もお年寄りの方も方言と共通語を使い分けている。中でも最も使い分けているのは40代、50代のいわば中年層の方であるという結果が出ております。この調査は私ども研究者が行っただけではなく、地元の方、佐藤武夫さんが会長をしていらっしゃる三川町の方言研究会の会員の方々にも三川弁、庄内弁を使って調査をしていただきま

した。これは非常に変わった調査でありまして、私ども研究者が共通語を使って調査をした結果と三川町の方々が方言を使って調査をした結果がどのように異なるかという調査です。この調査の様子はNHKのテレビで全国に放送されております。12年前の話ですが、改めてここで三川町の皆様にお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

吉岡 本当に御世話になりました。ありがとうございました。ちょっと時間がおしておりますので、これから 20 分まで休憩に入りたいと思います。第 2 部は 20 分から開始いたします。

<終了>